

氏 名 佐藤 優

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1572 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 伝説と縁起の民俗学的研究

論文審査委員 主 査 教授 常光 徹  
教授 小池 淳一  
教授 日高 薫  
特任教授 川島 秀一 神奈川大学  
准教授 花部 英雄 國學院大学

## 論文内容の要旨

本論文は東北地方に伝承されてきた源義経にまつわる2人の人物、常陸坊海尊と皆鶴姫に関する伝説の検討を通して、伝説と寺社縁起、地誌類との関係を把握し、伝説が受けつがれていく過程とその意味について考察したものである。

序章では、本論文で分析対象とする「伝説」と「縁起」の概念規定とその変遷について言及し、研究視角を提示した。具体的には、柳田國男が規定した伝説概念とその特徴について述べた。なかでも柳田が伝説を研究する際、固有名詞を具体的に取り上げて論じること躊躇したことを指摘した。また、固有名詞をもつ伝説を研究することは、伝説の変遷や変容をとらえる上で有効性があることについてもふれた。また、伝説は文字化され寺社の縁起やモノの由来を説く文字資料の中にも認めることができる。そこで、縁起や由来を記した書物と口頭伝承として民俗学において規定されている伝説との双方を研究する意義について論じた。そして、現在伝承されている伝説が、口頭伝承と文字文化の交錯によって形成されてきた具体的な事例として「甲賀三郎譚」と「犬の宮縁起」を取り上げ検討して、本論の研究視角を提示した。さらに、本論文で具体的に検討する常陸坊海尊と皆鶴姫は、双方とも源義経と関わる人物として文芸作品や伝説において造型されていることから、義経伝説と密接に関わると思われる。そこで義経伝説の研究について文学・歴史・民俗におけるこれまでの蓄積、成果を概観し、それらの視角を確認した。そして、常陸坊海尊と皆鶴姫二者の伝説を考察する理由もあわせて提示した。

第一章「外川仙人堂信仰と常陸坊海尊」では、外川仙人堂信仰を中心に常陸坊海尊が仙人として造型されていたこと及び海尊が信仰を展開する上で果たした機能について指摘した。具体的には、常陸坊海尊は、近世期富士山麓や能登地方などで仙人として出現したという伝承が確認できる。その中で現在の福井県大野市に鎮座する荒島神社の縁起に海尊は、仙人として位置づけられていることが確認できた。また、山形県最上郡戸沢村に鎮座する外川仙人堂でも海尊が、『新庄領村鑑』や『乩補出羽国風土略記』では仙人堂の祭神として位置づけられていたことも確認した。そして、この仙人堂が関東地方とりわけ現在の千葉県西北部地域に複数勧請されていることを指摘した。さらに、この地域ではアンバ大杉信仰も盛んであり、大杉大明神の縁起にも常陸坊海尊の奇瑞譚が記されている。また、千葉県は近世から現在に至るまで出羽三山信仰が盛んであることから、出羽三山登拝の途次、仙人堂を参拝したこの地域の人々が、アンバ大杉の信仰と関わる祭神を持つ神社として外川仙人堂を意識したことが勧請の背景として推定されると結論づけた。

第二章「青麻神社信仰と常陸坊海尊」では、東日本の青麻神社信仰を分析し、現在の宮城県仙台市宮城野区岩切に鎮座する青麻神社の縁起に常陸坊海尊が取り込まれた理由及び背景について考察した。具体的には、まず東日本の青麻神社信仰について整理をおこない、信仰実態を確認した。その中で講組織を持つ地域が秋田県・福島県・長野県で確認でき、本社として仙台の青麻神社を意識していることを指摘した。そして、各地の青麻神社の本社として認識されている仙台の青麻神社の信仰実態の分析をおこない、近世期より東

日本各地から信仰を集めていたことを確認した。そして、この神社において常陸坊海尊が『安永風土記』などの地誌や縁起の中で神として位置づけられている理由及び背景について考察した結果、神社を代々管理してきた家の先祖が仙人として認識されており、同じイメージをもつ常陸坊海尊が社家の祖先祭祀の際、先祖と同一視される形で祀られたことが明らかとなった。そして後年、「中風除け」というこの神社の特異な利益と関わる形で信仰に取り込まれるようになったことも明らかにした。

第三章「由来書の編纂と皆鶴姫伝説の変容」では、福島県会津若松市の皆鶴姫伝説を中心にこの伝説が、地域の歴史として書き留められた由来書の作成過程を分析し、地域の歴史認識及びこの伝説が様々な民俗を生み出す契機となったことを指摘した。具体的には、皆鶴姫の墓碑が現存する会津若松市藤倉地区においてこの伝説が現在どのように伝承されているかを検討した。現在藤倉地区において、毎年八月第四土曜日に皆鶴姫の墓前祭がおこなわれており、その後地域振興の催事「かわひがし皆鶴まつり」が舉行されていることを報告した。そして、この墓碑には近世の文人による漢詩文が刻まれており、その作成過程を考察した。さらに、近世期藤倉地区の有力者であった家で編纂された『皆鶴姫の記』の記述を分析し、史実として皆鶴姫を位置づけるために注釈を随所に施したことや墓碑文作成過程が記されていることに注目して分析を行った。また地域社会において現在も墓前祭や街おこしフェスティバルの中といったかたちで皆鶴姫伝説が機能している背景について言及した。具体的には近世末期、地域の有力者を務めた家が史実として皆鶴姫伝説を記述する書物を編み続けたことが、この伝説に関連した民俗を『皆鶴姫の記』編纂後に生み出した契機となったことを明らかにした。

終章では、第一章から第三章までの検討から得られた結果についてまとめ、今後の課題を提示した。まず、東北地方の常陸坊海尊伝説は、民俗信仰との関わりの中で伝承されてきた実態が明らかとなった。具体的には、本論文第一章と第二章において分析した外川仙人堂と青麻神社では、近世地誌や縁起の中で海尊が祭神として位置づけられていた。また、仙人堂が勧請された千葉県北西部地域では、縁起に海尊の靈験譚を記す大杉大明神の信仰も盛んであった。さらに、海尊の靈験譚は荒島権現の略縁起にも見いだすことができた。このような民俗信仰の文脈の中に海尊の伝説が取り込まれていた。そして、従来の常陸坊海尊伝説研究において言及されてきた長寿を得た人物の伝説という研究視角に加え、神社の歴史を投影される人物としても海尊が縁起や地誌の中で機能していることが明らかとなった。また、皆鶴姫伝説については、本論文第三章で『皆鶴姫の記』という書物の編纂過程やその内容を具体的に分析することで、伝説が地域の歴史意識を反映しながら伝承されている実態や伝説の内容と関わる民俗を生み出す契機となることを指摘した。

最後に今後の課題として、近世地誌や開帳記録及び図像などを分析資料として積極的に取りあげ、検討すること、観光や地域振興といった現代につながる文脈をも意識して伝説の受容過程を考察することを挙げた。

## 博士論文の審査結果の要旨

本論文は、伝説と縁起・由来が口頭伝承および文字の双方を介しながら伝承されている実態に着目し、多面的な視座から、それを分析することで伝説の形成と展開を明らかにし、さらに伝説を媒介として育まれてきた地域の歴史意識を考察することを目的としたものである。

序論では民俗学における伝説の研究史をたどり、固有名詞の排除から固有名詞の復権に至る過程を柳田國男や関敬吾、さらに近年の研究動向を整理して叙述している。また縁起という語の研究上の定義および課題、具体的な分析対象である義経伝説の先行研究の整理も行っている。膨大な伝説の研究史を固有名詞への着眼を視座に要領よく整理し、問題点を指摘した点、さらに縁起研究や義経伝説研究にも目配りして課題を析出した点は評価に値する。

第一章「外川仙人堂信仰と常陸坊海尊」では、まず、近世に修験によって山形県最上川流域の外川仙人堂の信仰が、その範囲を関東地方まで拡大していった実態を現地調査や文献資料を駆使して明らかにしている。その上で、祭神とされた常陸坊海尊がどのような経緯で仙人として位置づけられ造型されていったのかについて、出羽三山信仰との関わりを視野に入れながら論を展開していて興味深い。特に各伝承地に実際に足を運び、聞き取りのみならず石碑などに記された文字記録にも注意し、信仰の実態や担い手をとらえようとした点は評価される。

第二章「青麻神社信仰と常陸坊海尊」では、まず、青麻神社の鎮座地と勧請年代とを文献で押さえた上で、現地調査をおこない、この信仰の分布と東日本各地に広まった時期とを明らかにしている。信仰内容として中風除けに靈験があることを述べ、それが信仰を拡大していった有力な要因であったことを指摘する。石祠等の調査と聞き取り、史資料を用いて多面的な視点から、歴史的な深度を意識しながら信仰実態を描いている。アカザの杖の俗信を信者の側の働きかけで仙台の青麻神社が取り込んでいったのではないかの指摘は示唆に富む。さらに縁起の分析から、社家の先祖が仙人として認識され、同様のイメージをもつ常陸坊海尊が先祖と同一視される形で祭祀の対象となり、新たな利益とかわかって信仰に取り込まれるようになったと結論づけている。こうした青麻神社の勧請の実態と勧請に関わった人々の伝説・縁起への関与の指摘は、伝説研究の新たな方向を示している。特に縁起の持つ意味と信仰の実態とを有機的に結び付ける形での追究は十分評価に値する。また関連する多様な資料の発掘とその分析は、本論文全体を貫く地道な姿勢として評価できる。

第三章「由来書の編纂と皆鶴姫伝説の変容」では、会津若松市の藤倉地区における皆鶴姫伝説について伝承の実態を把握するとともに、墓碑に刻まれた碑文や関連文献を読み解き、伝説が書物と口頭伝承の関係のなかで変容し、新たな民俗を創出する契機になっていることを解明している。文字を操る階層の知識や認識が文字記録を介して口頭伝承へと流れていく道筋を提示したもので、伝説が地域の生活と関わる過程の考察に文字記録の介在

を意識することによって、従来の伝説研究とは異なる視点の提示に成功しているといえよう。

結論では全体の議論をまとめ、口頭伝承と文字文化が分かちがたく交錯する領域としての伝説研究において具体的な地域における伝承全体を見ずえる必要性を主張している。伝説が文字や記録と関わることはこれまでも指摘されてきたことであるが、新たな資料を見出し、それらを丹念に読み解いた上での手堅い論述は、海尊、皆鶴姫研究といった具体的な人物名を冠した伝説の伝承動態の研究に新たな視点を付け加えたといえる。

本論文は、全体としてこれまでの伝説研究の蓄積を踏まえたうえで新しい研究の視座を提示し成果を挙げている。ただし、第一章と第二章は、いささか民俗信仰にウェイトを置き過ぎている感がある。第三章では、どちらかといえば民俗信仰と伝説との関わりではなく、文字資料と伝説との関わりが主たる分析であり、肌合いが異なる。また「海尊」「皆鶴姫」といった固有名詞ばかりではなく、「青麻」「仙人」などの一般名詞などについても当時の社会的位相をふまえた考察が必要であろう。ただし、これらの問題点は本論文の価値を減じるものではなく、今後の課題に属するものといえよう。

本論文は数多くの伝承地における丁寧な民俗調査を基に議論を組み立てている点、地域社会における史資料の発掘と地域史における先行研究の吟味によって、地方寺社などの縁起や伝説をより広い文脈に押し上げようとする点など、研究の姿勢は真摯で好ましく、論者の研究面での力量を感じさせる。よって審査委員全員一致で博士の学位を授与するに値すると判断した。